

生徒の外国語能力を活かす情報教育環境の活用

—テレビ会議・Live 配信システムを活用による国境を越えた心の交流学习—

高等学校 情報・地歴

兵庫県立西宮今津高等学校 情報 佐藤 万寿美

キーワード：テレビ会議システム, Live 配信システム, 国際交流, 遠隔教育, 人権教育, 語学教育, Web, BBS

1. 概要とねらい

2002年度よりソウル市シンモク高校との継続的交流学習を、学校設定科目「国際文化」「情報コミュニケーション」で実施している。「国際文化」では主に異文化を学習し、「情報コミュニケーション」では生徒がテーマごとの制作物をWebコンテンツ化する教科横断型の連携授業である。本研究の目的は、本校Webサイトを交流の拠点とし、掲示板・テレビ会議システムを、簡単に日常的にすべての教科で活用できるような環境を整備することである。インターネット上のツールを効果的に活用できる学習デザインを研究し、生徒の自主的な継続的交流学習から英語・国語の基礎語学力の向上もねらいである。ここでは情報科の視点から、そのような授業の中での生徒の語学能力の育成と向上を支援できる情報環境の整備方法、テレビ会議システム・Live配信の授業への導入方法を紹介する。

<すべての教科で活用できる情報教育環境の整備内容>兵庫県教育情報ネットワーク、テレビ会議システム「MeetingPlaza」・Live 配信用サーバー・学校 Web ページ用サーバー(以上兵庫県教育研修所設置)、GCPN ポータルサイト、多言語対応キーボード・OS・OfficeXP、テレビ会議および Live 配信用マシン(Pentium4・メモリ 512MB 以上推奨)、配信用デジタルビデオカメラ、キャプチャーカード(Osprey220)、MicrosoftMedia エンコーダー9、プロジェクタ・スクリーン(2式)、マイク・スピーカー・ミキサー

2. 経過

2002年夏、シンモク高校を訪れ、本校人権教育部長(小西和治教諭)の努力が実り、インターネットを活用した交流学习が始まった。2003年には2度目の訪問、シンモク高校では担当の先生の熱意と努力が実り、「国際交流クラブ」が設置された。国境を越えた教員間の自主的な協力と連携、授業実践ではICT活用により、日本人・在日コリアン・韓国人高校生による三者交流が実現した。交流用言語は主に英語であったが、Web制作やBBSでは、日本語・英語・韓国語の3ヶ国語に積極的に挑戦した生徒もいた。今年度は、韓国語、英語のキーボード、WindowsXPやOfficeXPのMulti Language版でグローバルマシンを設置、韓国環境に一步近づいた交流学习を体験することができるようになった。テレビ会議システムは「MeetingPlaza」(兵庫県教育研修所設置)を双方から利用、Live配信は本校からMicrosoft Media エンコーダー9で、教育研修所のLive配信用サーバーへプッシュし、本校Webページにリンクを作成して、インターネット上で交流風景が韓国側からも見られるように環境を整備した。

3. 今年度の成果

1学期は本校Webサイトの掲示板やテレビ会議システムを活用して、交流学习を実施した。掲示板では英語と日本語、または日本語と韓国語の2ヶ国語で書き込むようにした。また、テレビ会議では韓国語の通訳をいれた会話のほか、今年は英会話のできる生徒が双方にいたので、生徒同志の自主的な英語によるコミュニケーションができた。シンモク高校の生徒の中には日本語を自主的に勉強して、日本語でのコミュニケーションができるようになった。7月にはシンモク高校から生徒と先生の訪日、本校側は国際文化担当教諭、国際理解委員会、保護者の理解と協力によりホームステイが実現した。今までTV会議や掲示板だけの交流だったが、生徒同志が出会えたことで、三者の相互理解を深めることが出来た。生徒同志は自主的に英語で交流した。継続的な交流学习を進めるなかで、12月のシンモク高校のFESTIVALへ、Live配信やテレビ会議システムを使った本校の参加が認められた。授業の中で取り組んできたテーマごとの研究発表をシンモク高校へ向けにプレゼンテーションすることになった。さらにはシンモク高校からの招待状が届き、本校の教諭と生徒が訪韓、FESTIVALの国際交流クラブのブースでのプレゼンターとして、日本と韓国を結ぶことができた。本校からのLiveが始まると、FESTIVAL会場から大きな歓声があがった。

4. おわりに

夏休みが終わった最初の授業で、「先生！みてみて」と生徒がやってきた。AirMailの赤と青の縞の封筒を握りしめているその姿には、電子メールに慣れてしまった今、妙に違和感があった。生徒同志が英語で文通をしていた。普段英語の授業になかなかついていけない生徒が、「英和辞書をひくようになった」「中学校の英語で大丈夫」と嬉しそうに語った。言語を自主的に学ぶきっかけとなり、なんだかとても微笑ましい光景だった。この3年間、ゆくりではあるが1段1段階を慎重にのぼるように、日韓交流がすすみ、生徒の取り組みも年々活発になってきた。国際文化担当の小西教諭の豊富な経験と工夫された学習活動、長年にわたる人権教育への熱意のたまものである。このように学習活動を支援する情報教育の役割、生徒の主体的活動を引き出す学習デザインの重要性を実感する。